

言葉と心をつなぐ

夏井いつき^{俳人}

「推し」のアイドルを見て、感動した」。このように語る高校生がいたとします。「感動」という言葉では、まるでピントの合わない写真のような、ぼんやりした感情しか表せません。では、その感動した瞬間、この子が捉えた映像の細部に注目してみましょう。「推し」の目はどんなふうだったか。「推し」が自分の横を通り抜けたあと、どんな風を感じたのか……見たもの、音、匂い、身体に触れた感覚。その細部にこそ、抱いた感動の真実があります。言葉にするということは、ある瞬間の心の動き、身体で捉えた記憶を、鮮やかなままに真空パックしていくようなものなのです。

言葉を磨くというと、何やらすごい文芸作品を創ることのように誤解されがちですが、本当に大事なものは、自分の体験や身体感覚と、言葉を結びつける力を得ることです。その手立てとして、俳句は初心者にもおすすめできます。なぜなら、体験や身体感覚の記憶を引っ張り出すためのフックとして「季語」があるからです。

例えば、この俳句。

秋風や模様のちがふ皿二つ 原 石鼎

秋を知らせる風は、もの寂しい、哀れな感じがします。これに“模様の違う皿が二つある”という映像を取り合わせると、おそろいの皿も買えないほど貧しいのかな、などと、負の感情が皿の向こう側に漂い始めます。では、この「秋風や」を「夏の風」と変えてみると、どうでしょう。青葉を揺り動かして、夏の風が吹き始めます。“模様の違う皿二つ”も、まるでキャンプに出かけた若者たちが使う皿のような、わくわくする情景に見えてきませんか。

このように私たちが感じられるのは、意識していなくても、季節ごとに吹く風の表情の違いを、身体が知っているからです。その感覚と言葉が結びつくと、季語に託して、自分の複雑な感情を表現できるようになってきます。これは才能の有りに関係なく、トレーニングで鍛えられるものです。日々、身の回りにある季語にアンテナを立てることで、何気ない景色から学びが得られます。だから俳句を始めると、人生を三倍くらいの密度で生きているような気持ちになります。そして、ひとりで過ごす時間が、どんどん豊かになっていく。それは同時に、孤独というものが怖くなくなることであります。

「私にはそんな表現力はない」「言語化が苦手だ」。そんなふうにする高校生がいたら、私はその子にこそ、あなたには俳句の素質があると言いたい。言語化が苦手だとわざわざ言うのは、自分の言葉の“伝わらなさ”に敏感な証拠だから。自分のことをうまく伝えられない。話が通じない。だから孤独だ。——そう感じている子にこそ、私は「一緒に俳句をやろうよ」と言いたいな。

Profile

なついつき ● 1957年生まれ。松山市在住。俳句集団「いつき組」組長。第8回俳壇賞。第72回日本放送協会放送文化賞。第4回種田山頭火賞。俳句甲子園創設に携わる。松山市「俳句ポスト365」等選者。初代俳都松山大使。「句集 伊月集 鶴」等著書多数。

誌面に掲載しきれなかった、夏井いつきさんからの言葉をWebで公開しています。こちら合わせてご覧ください。(10月20日以降にご覧いただけます)
<https://souken.shingakunet.com/secondary/2023/10/448opening.html>



取材・文／塚田智恵美 撮影／後藤さくら



「嬉しい」「悲しい」の言葉では
表せない、複雑な心のひだに
触れるための言葉を知る